

はじめての

万葉集

[vol.34]

日本に現存する最古の和歌集『万葉集』をわかりやすく紹介します。

からまる豆

二月は節分ですね。奈良県各地の神社やお寺でも豆まきが行われます。

豆、とくに大豆は古代から貴重なタンパク源として重宝されてきました。『万葉集』に豆を詠んだ歌は意外にも一首だけです。

その一首が右の歌にあたります。天平勝宝七歳(七五五年)二月に、上総国天羽郡(現在の千葉県富津市の西南部)出身の丈部鳥が防人(海防のために九州におかれた兵。三年交替制で、はじめは東国から派遣され、のちに九州からの徴発となった)として九州へ派遣された際に詠んだ歌です。

からまりついて離れまいとする「君」と別れて遠地へと赴く辛さが詠まれています。「君」は、家に残す

道の辺の 茨の末に 這ほ豆の
からまる君を 別れか行かむ

丈部鳥 卷二十 四三五二番歌

道のほとりのイバラの先に、はい伸びる豆のつるがからまるようなあなたを、後に置いて私は行くのか。

ことになる妻とする説、あるいは『万葉集』で用いられる「君」が男性を指すことが多いことから主君の若君とする説の二つが考えられています。

「君」は、まるで豆(万葉仮名では「麻米」)のツルが、トゲのある「茨」(万葉仮名では「宇万良」。ノイバラのこと)の枝先に纏い付くようになり、まつて離れがたくいる、とあります。ここで「からまる」にかかる序詞のなかに豆が出てくることからわかるように、詠まれているのはツルメメノマメといった類いの豆です。ツルメメは大豆の原種とされる野生の豆といわれるだけあって、大豆に似ています。

ツルメメもノイバラも野原に自生するので古代から身近にある植物だったことでしょう。『万葉集』の歌に数首しか詠まれていないのは、それだけ身近に、当たり前前に存在していたからかもしれないですね。

(本文 万葉文化館 小倉久美子)



宇陀の黒大豆

宇陀は夏場が比較的涼しく昼夜の温度差が大きいため、味の良い黒大豆が生産されています。天日で自然乾燥を行うためシワのない質の高い豆になります。

黒豆菓子や煮豆缶詰など、手軽に食べられる加工品も販売され、宇陀の新たな名産品となっています。黒大豆や加工品は宇陀市内の農産物直売所や道の駅などで購入できます。



宇陀産の黒大豆

問 県東部農林振興事務所
☎0745-82-3248 FAX0745-82-1118

問 県広報広聴課 ☎0742-27-8326 FAX0742-22-6904

万葉ちゃんの つぶやき

和歌に関連するものを紹介するよ!!

万葉ちゃん